提言

『日本宗教史』全六巻の刊行に寄せて

島薗　進

はじめに

伊藤聡・上島享・佐藤文子・吉田一彦の四氏の編集によるシリーズ『日本宗教史』（全六巻）の刊行によって大いに元気づけられた一読者として、本シリーズの刊行の意義について考えを述べる。まずは個人的な回顧から始めたい。私は自分の専攻する研究分野・研究領域を述べるときは、「宗教学・死生学・近代日本宗教史」などとすることが多い。ただ、ときには「日本宗教史」と書くこともある。他方、「宗教社会学」と書くことはあまりないが、実は自分のしていることが宗教社会学に近いということも意識しているつもりである。

そのことを私の研究歴、とくに研究を始めた頃のことから述べていくと、東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻で一九七二年にまとめた修士論文は、折口信夫の「民族論理」論について書いたものだった。続いて一九七〇年代半ばから八〇年代初めにかけては、初期新宗教、すなわち天理教や金光教の教祖の宗教性について研究した。どちらも自分なりに日本人の宗教性についてわかりたいということと、そもそも宗教とは何かについて考えたいということが動機にあった。そこで、初期新宗教研究が宗教史研究とどう関わっていたかについてもう少し述べたい。

一、一九七〇年代の日本宗教史研究を振り返る

民衆宗教研究とその周辺

一九七〇年代に日本の初期新宗教研究にとりかかるとき、手がかりになったのは、一方では、日本の人文社会科学、なかでも歴史学や民俗学における宗教研究であり、他方では、欧米の宗教社会学の理論だった。国際的な比較を踏まえ、現代的な人文社会科学の宗教理解に照らしながら、「日本の新宗教とは何か」を捉えたいと考えたのだ。

その際、日本の歴史学や民俗学から学ぶことは多かった。初期新宗教研究（天理教、金光教など）に関わる歴史学の成果としては、民衆思想史・民衆文化史の立場からの「民衆宗教」論研究から学ぶことが多かった。村上重良『近代民衆宗教史の研究』（増訂版、法藏館、一九六三年）、鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』（筑摩書房、一九六九年）、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、一九七四年）、ひろたまさき『文明開化と民衆意識』（青木書店、一九八〇年）といった研究である。村上重良・安丸良夫『日本思想大系67 民衆宗教の思想』（岩波書店、一九七一年）には大いに助けられた。村上は宗教学を学んだ人だが、歴史学の影響の方が大きいというタイプの研究者だった。村上の編で平凡社の東洋文庫から民衆宗教の聖典も何冊か刊行された。

この研究領域は、マルクス主義の発展史観を民衆文化や宗教文化という観点から見直すような方向で進められていたものだ。世界的には、民衆文化研究（ミシュレ、グラムシなど）やアナール派の社会史、あるいはサバルタン研究などの流れへと連なるものと相通じる方向性をもったものだ。私は小沢浩、桂島宣弘、神田秀雄といった研究者と交流しながら、民衆宗教・新宗教研究を進めていった。だが、この流れの研究は今の日本の歴史学における宗教研究へとつながってはいないようだ。『神道の成立』（平凡社、一九七九年）の著者である高取正男とは、国立民族学博物館の民衆宗教運動の比較研究のプロジェクトで交流する機会をもった。千年王国運動の比較研究に取り組む文化人類学者や歴史学者とも交流する機会を得た。

民俗学と日本宗教史研究会

一方、民俗学に近い領域の研究にも大いに参考になるものがあった。宮田登『ミロク信仰の研究』（未來社、一九七〇年）、同『生き神信仰』（塙書房、一九七五年）、桜井

徳太郎『講集団成立過程の研究』（吉川弘文館、一九六二年）、同『日本のシャマニズム』上・下（吉川弘文館、一九七四年・七七年）などである。宮田や桜井は東京教育大学で歴史学と民俗学を学び教えた人たちだが、その周囲には宗教史研究を自分の分野とする人々が多く、日本宗教史研究会という研究者集団もあった。笠原一男、下出積輿、大隅和雄、圭室文雄、池田英俊といった人々もいて、独自の相互交流の場をもっていた。この研究者集団は『日本宗教史研究年報』（一九七八～八三年）を刊行していた時期もあり、一九九〇年代の初頭には『講座神道』全三巻（桜楓社）も出している。

この研究者集団と重なる著者たちが評論社から「日本人の行動と思想」というシリーズを出したのも一九七〇年前後で、高木豊『日蓮』、笠原一男『一向一揆』、吉田久一『日本の近代社会と仏教』、森岡清美『日本の近代社会とキリスト教』などが含まれていた。森岡は社会学者だが、歴史学的な宗教研究の成果も多かった。さらに遡ると、家永三郎・赤松俊秀・圭室諦成監修『日本仏教史』全三巻（法藏館、一九六七年）があったのは心強かった。佼成出版社から『アジア仏教史』（全二〇巻）が刊行されたのも一九七〇年代前半だった。歴史学においてはなおマルクス主義の影響が色濃く、社会経済史研究が主軸だった時代だが、以上に見てきたように、一九七〇年代には日本宗教史研究がある程度の研究者の層を形成しており、私はそれに助けられて初期新宗教（民衆宗教）研究を進めたのだった。

二、一九九〇年代以降の展開

九〇年代以降の日本仏教研究と宗教史・思想史

その後の展開を思い起こすと、一九九二年には日本近代仏教史研究会が開始され、同時期に大久保良峻、佐藤弘夫、末木文美士、林淳、松尾剛次による日本仏教研究のグループが形成された。この集団が解散した後、日本仏教綜合研究学会が立ち上がったのは二〇〇二年である。『新アジア仏教史』全一五巻、うち日本仏教史は五巻（二〇一〇～一一年）も刊行された。これとは別に高埜利彦らによる近世宗教史研究の動きもあった。古代史、中世史で宗教研究が豊かに展開していることもいくらかは知っていたが、勉強不足は否めない。私にとっては、これらが私が大学院生の頃に学んだ日本宗教史研究にかわる新世代の日本宗教史研究の諸潮流であるが、十分に理解し得ていないことを残念に思っていた。

二〇二〇年から二一年にかけて、吉川弘文館から刊行

されたシリーズ『日本仏教史』（全六巻）は、歴史学の新たな展開に疎いものが感じていたこの欠落感を払拭してくれるものだった。なお、私自身、江戸時代から明治時代までを扱ったシリーズ『日本人と宗教』全六巻（春秋社、二〇一四～一六年）、明治維新期から現代までを扱ったシリーズ『近代日本宗教史』全六巻（春秋社、二〇二〇～二一年）の編集に加わっている。近世以降については何とか追いつこうとしてきたが、それ以前は諦めざるをえなかったのだ。

一方、日本思想史研究の方は日本思想史学会の存在もあり、堅調な発展を続けているように見える。日本思想史研究と日本宗教史研究とが相並んで刺激し合うような形で発展する基盤が形成されているように思う。本シリーズ『日本宗教史』は日本思想史研究の動向にも相応の関心を払い、その成果を取り込もうとしているように見受けられる。

本シリーズの目指すところ

では、このシリーズ『日本宗教史』の特徴はどこにあるのだろうか。編者連名の「刊行のことば」や吉田一彦「総論　日本宗教史を問い直す」（第一巻『日本宗教史を問い直す』）に、本シリーズの目指すところがまとめられている。後者では、「第一は、日本の宗教史を文化交流史の視座から捉えること」、「第二は、日本の宗教史を国家や社会との関係で考えること、すなわち国家と宗教、政治と宗教という視座からとらえること」、「第三は、日本の宗教史を宗教の土着という視座からとらえること」とされている。この「第三」は、文化交流において、新しいものが取り込まれたり生まれたりする先端的な層と、それが民衆を含む広い層に受け入れられていく事態との双方を捉え、民衆史に通じる後者も重んじるということである。これによると、政治史から文化史・社会史までの歴史の全体を見ようとする歴史学の本流的な姿勢、一国史を超えて世界史、アジア史のなかで捉え、とりわけ「文化交流」を重んじようとする姿勢が示されている。

他方、「刊行のことば」では、「一つは、日本の宗教を古代・中世・近世・近代・現代という長い時間軸の中でとらえ、各時代における特質や時期的な変遷あるいは継続の様相を明らかにしていくこと」、「二つ目は、日本の宗教を世界の文化と歴史の中で考えること」、「三つ目は、日本列島に生きた人々の信仰の実態に着目して宗教史を研究すること」、「四つ目は、さまざまな学問分野から日本宗教史を再構築すること」があげられている。吉田の第一巻「総論」と重なり合っているのは当然だが、ここ

ではさらに、多分野による共同で取り組み、「人文学」としての新たな研究を目指すとされている。歴史学に軸足を起きつつも、個々のディシプリンを超えて新たな「人文学」を展望するという姿勢が示されている。

たいへん野心的な編集方針であり、それが確かに実現していることに大いに敬意を表したい。六巻の構成は以下のとおりである。

吉田一彦・上島享編『日本宗教史1　日本宗教史を問い直す』
上島享・吉田一彦編『日本宗教史2　世界のなかの日本宗教』
伊藤聡・吉田一彦編『日本宗教史3　宗教の融合と分離・衝突』
佐藤文子・上島享編『日本宗教史4　宗教の変容と交流』
伊藤聡・佐藤文子編『日本宗教史5　日本宗教の信仰世界』
佐藤文子・吉田一彦編『日本宗教史6　日本宗教史研究の軌跡』

世界史やアジア史の中で考える

世界史やアジア史の中で考えるという点は、多くの論考で示されている。七〇年代、八〇年代あたりまでの日本宗教史では、日本の一国内での変化や展開と見られがちであったものを、世界史やアジア史、とりわけ中国における宗教史の変化や展開に照らし合わせて捉えるという視座である。法然、道元、親鸞、日蓮ら、鎌倉仏教の祖師たちが独自の境地を切り開くことによって、日本仏教史は大きくその様相が変容したという見方は後景に退いている。

実際、上島享の「日本中世の宗教史」（第一巻『日本宗教史を問い直す』）には、祖師たちの「新仏教」の解説はほとんど出てこない。「ユーラシア東部世界の変貌」から説き起こされ、安氏の乱（八世紀中葉）から「唐宋変革」へという大陸の体制変革が、九世紀の「国風文化」の興隆につながる。続いて貴族による支配が崩れて、地方の反乱が恐れられる時代となり、忠誠を重んじる武士権力と封建体制へと進んでいく。権門体制・顕密仏教が主軸だが、そこから日本独自の宗派的な分立が起こっていくと捉えられてきたところだ。だが、上島の論で仏教の変革は国内のリーダーの主導による内在的な変革というより、社会構造の変化とともに顕密仏教と異質な浄土教・禅・律が興隆する中国宋代仏教がもたらしたものして捉えられる側面が大きいとされる。蘭渓道隆の重要性

が強調される所以でもある。そして、室町時代に進む中世宗教の解体はモンゴル・インパクトによる世界史的な支配秩序の変革と結びつけられる。本シリーズの目指すところは、中世の宗教史叙述において典型的に具現されているようだ。

私自身、仏教の社会倫理の歴史という観点から、鎌倉新仏教に重きを置く祖師中心の仏教史が近代的な宗教観に偏り、また気づかぬうちに自国中心主義に陥るものではないかと考えてきた（『日本仏教の社会倫理』岩波書店、二〇一三年）。そこでは、和辻哲郎や中村元の、また鈴木大拙、丸山眞男、井上光貞らの基底にある鎌倉新仏教中心史観の捉え返しを試みたつもりだが、唐から宋への中国仏教の大きな転換がもたらした影響については知識が十分でなかった。上島による中世仏教史の展望は、東アジア大乗仏教の歴史という視点の下で、日本の中世仏教を捉えており、日本宗教史のパラダイム転換が起こりつつあると感じた。

国家仏教と神仏融合

以上は本シリーズの特徴が典型的に現れているものを示そうとしたものだが、シリーズ全体が意図的にそれを遂行しようとしていると理解している。第六巻『日本宗教史研究の軌跡』では、自覚的に従来の日本宗教史研究の再検討が行われている。「宗教」「仏教」「神道」概念の近代的バイアスの検討、日本の「宗教学」「宗教社会学」の捉え返し、「宗派」概念の検討、「祖師史観」の捉え返しなど、いずれも時宜にかなった方法論的検討が行われている。

編者の一人である佐藤文子らによって進められてきた奈良時代の仏教を「国家仏教」とする論の批判については、第六巻で佐藤自身とブライアン・ロウによってわかりやすく説かれている。境野光洋から黒板勝美へと引き継がれ、ポジティブな像が強調された戦前から、戦時期の経験を経てネガティブな像に転換しつつ、「国家仏教」という枠組みは維持され、一九七一年の井上光貞『日本古代の国家と仏教』（岩波書店）へと至る。しかし、奈良時代の仏教が広く当時の社会の諸地域、諸階層に実践されていたことを示す資料の検討が進み、もはや「国家仏教」は受け入れにくい固定観念になってしまっている。

同様に、神仏習合を日本独自の現象として強調する捉え方についても再検討が進んでいる。第三巻『宗教の融合と分離・衝突』に収録された吉田一彦「奈良・平安時代の神仏融合」は、この問題を正面から取り上げている。「仏法と神信仰の融合は、中国、朝鮮半島、ベトナム、

台湾などの大乗仏教圏に広く見られ、東南アジアの上座部仏教圏にも見られる」（四一頁）。そもそもインドにおいて濃厚に展開してきたものだった。だが、一一世紀から一二世紀にかけて本地垂迹説が形成されたのは日本独自の展開である。

「神道はいつからあるか」問題

神仏習合は日本独自のものでもないというとき、「神」は神信仰を指しており、「神道」を指すものではないという理解が前提になっている。ここで、「神道」はいつからあるのかという日本宗教史の難問が関わってくる。編者の一人である伊藤聡はこの問題に取り組んで、古代には神道はなかったという立場をとってきており、吉田もそれを是認しており、本シリーズも全体としてその理解に従っているように見える。確かに「神道」の概念が流通するのは両部神道・伊勢神道以来のことであり、宗教集団としての神道は吉田神道以降ということになるだろう。

だが、そもそもそれほどまでに神仏習合のなかで神祇信仰が強力な自律性を発揮するのはなぜなのか。本地垂迹説は仏と同等の力を神が発揮するという信仰を示してもいるが、それほどまでに神祇信仰が強力に発展したのはなぜか。七世紀末に伊勢神宮が成立し、記紀神話が文書化され、神祇官をとおして律令体制のなかで神祇信仰の組織化が行われたことは大きい。井上順孝（『神道――日本生まれの宗教システム』新曜社、一九九八年）、岡田荘司（『日本神道史』吉川弘文館、二〇一〇年）、新谷尚紀（『神道入門』筑摩書房、二〇一八年）など律令神道、古代国家神道を前提とする神道論は多い。現在の神社神道の立場からの主張も重なるものであるが、「宗教」をどう捉えるかと深く関わる問題である。日本の神仏習合とは、この古代国家における天皇の祖神であり「天壌無窮の神勅」の源泉＝アマテラス信仰と、神祇官・神祇令による神祇の組織化、また班幣制度が前提とする地方の神々の権威の承認と関連して考察すべきものではないか。吉田一彦のいう「天皇制度」という用語も苦肉の用語法のように見えるが、そこに古代日本国家の一つの宗教的基盤があることを明確化する必要があるだろう。

脱構築と現代的問題意識

私が以上のような感想をもつのは、現代の問いから日本の宗教史を捉え返すという姿勢が強いからで、近現代に関心をもつものの偏りがあるかもしれない。本シリーズでは、一九八〇年代頃までに前提とされていた日本宗

教史の固定観念、あるいは古いパラダイムが脱構築されていると見ることができる。近代的宗教観や一国史観とつながるような日本宗教史の見方の見直しである。

(1)古代仏教は国家に従属していた。
(2)神道は古代から実在している。
(3)鎌倉新仏教が日本仏教史の転換点である。
(4)祖師たちの思想の理解が日本宗教史理解の鍵となる。
(5)祖霊信仰と葬祭の重視は古くからの土着的な信仰に由来する。
(6)将軍権力とキリシタン禁圧が日本宗教の停滞をもたらした。
(7)江戸幕府の仏教統制・利用政策が日本仏教の停滞をもたらした。
(8)近代における宗教の国家への従属は「天皇制」「国家神道」によるものだ。

近現代宗教史に関心をもつ者として、これらの固定観念へのゆさぶりはいずれもよく理解できるものである。とはいえ、これに対して、比較の視点をもって、日本宗教史を宗教学的、宗教社会学的に説明しようとすると、以下のような問いに出会うことになる。

(ア)なぜ、日本の仏教は本末関係で組織され、宗派毎に結束するような体制になったのか。
(イ)なぜ、戒律について独自の捉え方をし、肉食妻帯許容の仏教が優位を占めるに至ったのか。
(ウ)なぜ、土着の神信仰を基盤とする神社神道が大きな勢力をもって存在するに至ったのか。
(エ)なぜ、皇室の神道儀礼や靖国神社が国家体制に関わる政治的争点となったのか。
(オ)なぜ、新宗教がかくも多くの勢力をもったのか。
(カ)なぜ、戦前、かつての神仏習合を基盤とする教派神道が大きな勢力をもったのか。
(キ)なぜ、法華系の仏教運動がかくも大きな勢力をもつに至ったのか。
(ク)なぜ、近代に至ってもキリスト教集団の影響が限定的にとどまっているのか。

国家と宗教の関係についての比較枠組み

こうした問いに答えるためのヒントは本シリーズのなかに、豊かに織り込まれている。たとえば、遠藤潤「近代神道研究をめぐる諸相――柳田國男「神道私見」を視点として」（第六巻）では、一九一八年に公表された「神道私見」において、柳田が「東洋諸国共通の国教問題」に言及していることを紹介している。これは、当時、成立しようとしている中華民国の憲法において「孔子教」

国教化の議論がなされていることにふれたものだが、遠藤は「柳田が、神道の問題を近代の東アジア諸国に共通する国教／諸宗教の問題として理解している点は注目に値する」と論じている。ベトナムや沖縄なども含めて、東アジアにおける国家と宗教の関係をめぐる共通の問いがあるという観点が、すでに一九一〇年代に示されていたことは興味深い。

この比較の観点は、このシリーズの基本的な枠組みにそったものではないだろうか。また、こうした観点は国家と宗教の関係を普遍的な理論枠組みを探りながら問う宗教社会学的な問題意識に近いものである。中世であれば、「仏法王法相依論」という概念が関わるものだ。これについては、宗教史においても思想史においても多くの論が展開されてきている。本シリーズでもこの概念は要所に登場しているが、では、近世・近代・現代においてこれがどのように展開し、世界の諸地域と照らし合わせて、日本のそれはどのような特徴をもつのか。こうした問題は、未だに十分な考察がなされていないものである。

こうした問いが今ひとつ明確に主題化されていないことは、とくに近現代の宗教史に焦点を置いて学んできた者としてもの足りなく思われるところでもある。これは四人の編者が古代史、中世史を専門とする研究者であることとも関わりがあるだろう。もちろん、本シリーズの中に近世・近代・現代に及ぶ論考は少なからず含まれており、それぞれに啓発的な資料提示や理論的考察がなされており、学ぶところは多い。

先に私が関わった、二つのシリーズ『日本人と宗教』全六巻（春秋社、二〇一四～一六年）と『近代日本宗教史』全六巻（春秋社、二〇二〇～二一年）にふれたが、両シリーズが取り組んでいる問題について、相互に対話し合うような場が広がっていくことが望ましいと思う。本シリーズで古代史・中世史の専門家が編者として提示した日本宗教史研究の再構成の豊かな成果を、近現代の宗教史を見る上でさらに生かし、拡充していくような場が展開することが望ましい。

日本宗教史と日本思想史

最後に触れておきたいのは、このシリーズと日本思想史研究との関係である。「日本宗教史」と「日本思想史」は重なり合うところの大きい研究領域である。だが、「思想史」は書かれた文書に表現された「思想」を対象とする領域と考えられがちである。他方、「宗教史」は文書化された「思想」ももちろん対象に含まれるが、実

践の様態や集団のあり方、建造物や美術品、文学表現や口頭伝承なども対象となる。第一巻『日本宗教史を問い直す』はそのことを強く意識し、関連する人文学のさまざまな領域からの寄稿が含まれている。

かつて、柳田國男や折口信夫が文字に残されにくい伝承の研究を重んじ、そうした伝承の中核に「心意伝承」があると考えたことが思い起こされる。これに刺激されて、戦後のある時期までは「民衆思想」研究や「思想の科学」といった試みが盛んだった。宗教学では早くから宗教人類学が重要な一翼を担っており、二一世紀に入ってからも「生きられる宗教（lived religion）」の研究の重要性が指摘されている（たとえば、Meredith McGuire, *Lived Religion: Faith and Practice in Everyday Life*, Oxford University Press, 2008）。これらは「生活形式のなかの宗教」の重要性に注目し、それを汲み上げようとした試みといえる。

このシリーズ『日本宗教史』は宗教に対して多面的にアプローチしているが、「生活形式のなかの宗教」にも多くの注意を払っているといえるだろう。本シリーズ第五巻が『日本宗教の信仰世界』という題を掲げているのは、こうした世界的な研究動向とも合致しているように思える。文化人類学的なアプローチとの共通性という点では、アナール派など歴史学における社会史の重視の潮流とも符節を合わせているように思われる。もちろん文書化された「思想」が研究対象としてたいへん重要なものであることを否定しようとしているわけではない。組織された思考が文書化されて表出され、社会的に大きな影響力を及ぼすことについても異論はない。だが、「思想史」研究は本書で大いに関心を払われているような宗教の諸側面にどうアプローチするのだろうか。この問いは取り組みがいのあるものではないだろうか。

他方、儒学研究に多くの成果と蓄積がある日本思想史研究の成果は、日本宗教史研究に十分に取り込まれているだろうか。東アジア世界の宗教史は、儒教を大きなプレイヤーとして組み直すことがないと見通しがつきにくいのではないか。このような観点は本シリーズでも見え始めているが、儒教を宗教ではないとする見方が、日本宗教史研究における儒教研究への制約要因になっていないだろうか。小島毅『増補 靖国史観』（ちくま学芸文庫、二〇一四年）、岩田重則『靖国神社論』（青土社、二〇二〇年）などが示すように、昨今の国家神道研究では、水戸学や皇道・皇国論の歴史への関心が高いことなども思い起こされる。日本思想史研究からのいっそうの参入が待たれるところだろう。

「宗教史」研究と「思想史」研究はどう交差するのか。

この問いには、民俗学、文学史、芸能史、美術史、建築史、そして文化人類学や歴史社会学などさまざまな関連分野も関心を抱くことだろう。「人文学」という視野で「宗教史」を捉えようとするシリーズ『日本宗教史』は、こうした長期的な方法論的な問いも、新たな形で投げかけているように思う。

（大正大学客員教授）